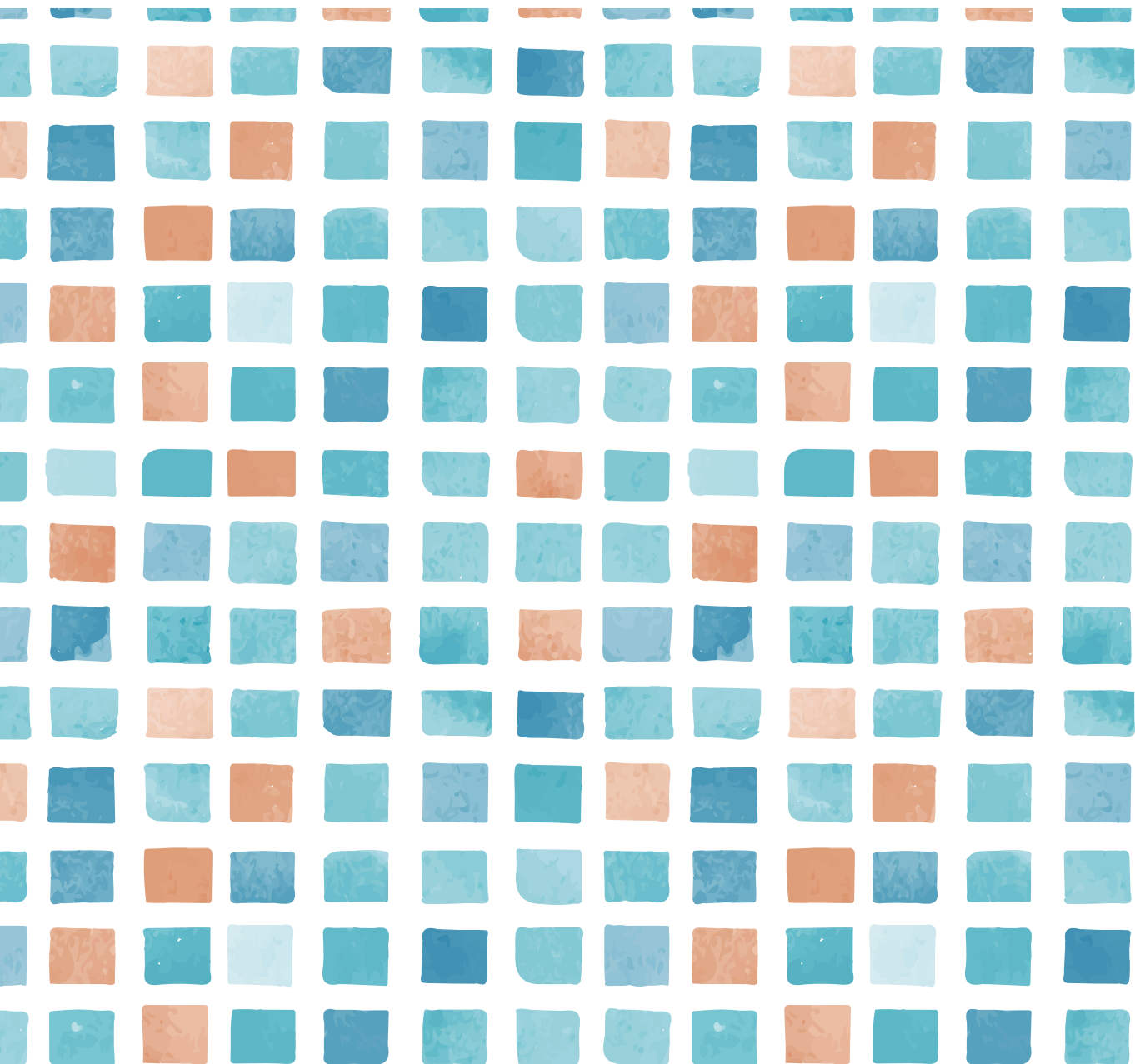


千葉で生まれたみんなの物語 とぼす、

Topos

3 2024
Spring

休眠預金等活用事業 2020年度通常枠 草の根活動支援事業
「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」レポート



金融機関で使われていない「休眠預金」で、 社会を支える仕組みを作っています。

休眠預金事業とは、銀行などで10年以上取引のない預金などを原資にして、社会課題の解決や民間の公益活動の推進のために活用する制度です。

ちばのWA地域づくり基金は、児童養護施設入所者や退所者の20歳前後の若者が、頼れる大人もいなくて困難な生活を送っている現状を変えるため、2020年度の休眠預金事業に「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」を提案し、4つの実行団体とともに事業を推進してきました。

この冊子は、ちばのWAと4つの実行団体が3年間の事業で目指したものの、そこから生まれた成果をまとめたものです。冊子を通じて、社会的養護経験者が抱える困難に、もっと支援の輪が広がることを願っています。

※休眠預金事業の仕組みは22ページをご覧ください。

私たちは、「社会的養護」の下で育った子どもたちを、
どれだけ知っているでしょうか。
いや、この言葉を知らない人の方が多いかもしれません。
社会的養護とは、虐待、死別、貧困、病気など、
さまざまな理由で親のもとで暮らせない子どもたちを、
公的な責任のもとで保護・養育して支援すること。
日本には約4万2千人の社会的養護下の子どもがいます。
つらい経験をした子どもの中には、
心の傷を抱えたまま社会に出る子もいます。
就職しても大人を信用できず、仕事が続かない。
助けてくれる人もいなくて、食べるものもない。
そんな困難を抱えた若者がたくさんいます。
「とぼす」はギリシヤ語で「場」という意味です。
疲れ果てた若者たちが「とぼす」に戻ってきて、
弱った羽と心を休めて、ちよつとエネルギーをためて、
元気になったら、また新しく旅立つ場所。
この冊子は、休眠預金事業の助成を受けて、
巣を失った子どもたち一人ひとりの「とぼす」を、
試行錯誤しながらつくり続けてきた人たちの物語です。
みんなの夢は、「とぼす」から無事に巣立った子が、
近い将来に自分たちの新しい巣をつくって、
次は自分が困った人を支える親鳥になること。
そんな未来を夢見ながら、編みました。

もくじ

- 02 「とぼす」とは
- 04 支える人、支えられる人、一つになる場所。
- 10 ちばのWAが実現したいこと
- 12 実行団体が振り返る事業の成果
- 14 実行団体代表者座談会
- 18 「非資金的支援」3年間の歩み
- 20 数字と実績で見る休眠預金事業の社会的インパクト評価
- 22 休眠預金等活用とは
- 23 理事長あいさつ
- 24 事業基本情報／さくら基金への寄付のお願い



支える人、支えられる人、 一つになる場所。

孤独に陥った若者が最も必要とするもの。それは、信頼できる大人がいること、そして安心して過ごせる居場所。休眠預金事業を活用した4つの実行団体の活動をレポートします。

文・写真 西岡千史、稲村絵美里



たどり着いた安心の家

ジャガイモの花言葉は「慈愛」「恩恵」「情け深い」。痩せた土地でも育ちやすく、食物繊維が豊富で腹持ちがいい。「貧者のパン」とも呼ばれ、飢饉の時に多くの命を救ってきた。そんな歴史から、優しさを示す花言葉が選ばれたのだろう。

千葉県柏市の「いっぽの会」は、児童養護施設など社会的養護の下で暮らした経験のある若者のために、一軒家のシェアハウス「若者応援ハウス」を運営している。庭にある畑ではジャガイモが栽培され、収穫期にはシェアハウスの利用者、職員、地域の人が畑を掘り起こす。

昨年11月まで入居していた小池あゆみさんは、このジャガイモ掘りが大好きだった。「誰が大きいイモをとれるかで、いつも競争していました」と笑う。

小池さんは、小学生の頃に両親を相次いで亡くし、児童養護施設で過ごすことになった。18歳で退所した後は友人と一緒に暮らしていたが、その友人が仕事を辞めて収入が激減し、生活が困窮してしまった。小池さんが入居した2022年

秋には光熱費の支払いにも困る状況で、借金も抱えていた。

小池さんは、最初はお金の悩みを誰にも言えずにいた。しかし、次第に返済を求める請求書がシェアハウスに届くようになった。もう、隠し通すのは限界だった。小池さんは言う。

「正直に話すしかなくて、いっぽの会の職員さんに経緯を伝えました。そうしたら一緒に計画を立てて借金を返済しよ



若者応援ハウスの畑でのジャガイモ収穫風景（いっぽの会提供）



(写真上) 収穫したじゃがいも、
(右) 談笑する職員と若者たち

う」と言ってくれたんです」

毎月の給料から、生活費、小遣い、借金の返済額、そして自立に必要な貯金額などを一目でわかるグラフにした。1カ月の支出をその枠内に収めるためだ。そして、毎月の面談で収支を報告した。

「計画を立てたら借金が減るだけではないくて、お金も貯まっていって。面談がいつも楽しみでした（笑）」（小池さん）

小池さんは、シェアハウスを退去した後、一人暮らしを始め、今は運送会社で

働いている。シェアハウス暮らしの間に、イベントや畑作業を通じて地域の人たちとの交流も生まれた。借金は今年の夏ごろに完済できる予定だ。

必要な大人の「友達」

虐待や病気、死別などを理由に実親と一緒に暮らせず、社会的養護の下にある子どもは、全国に4万2千人いる。そのうち、2万3千人が児童養護施設で生活している。

厚生労働省が21年に公表した実態調査によると、施設を退所した若者のうち5人に1人が収入よりも支出が多い「赤字生活」に陥っていた。退所者の約6割が高校卒業時の18歳で退所していて、金銭面で頼れる人がいないだけでなく、企業や地域社会で暮らしていくための知識や経験が少ないことも要因として指摘されている。

千葉県八千代市の「はこぶね」では、そんな社会的養護の経験者が、大人と安心して話ができる居場所づくりを目指している。現在の利用者数は約25人。開所時間はいつでも、何度でも利用できるの



が特徴だ。代表の大藪真樹さんは言う。

「施設で暮らす子どもは、施設の中だけの人的ネットワークで完結してしまうことが多い。それで、施設を退所すると関係性が一気に失われ、孤立してしまう」

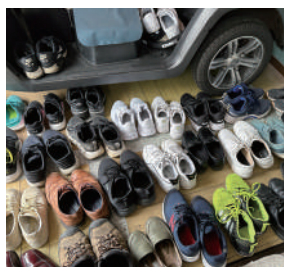
その時に必要となるのが、人生の先輩である大人の「友達」だ。気軽に話ができ、困り事を相談できる人。はこぶねでは、そんな大人たちを「フレンズ」と呼ぶ。一緒に料理を作ったり、イベントを開催したり。ちょっとした会話から、



はこぶねの活動方針をまとめた資料

照)。いつかの会とはこぶねも実行団体として、3年間の活動を続けた。

同じく実行団体に選ばれた「ベストサポート」は「大人のTERAKOYA」という事業をスタートさせた。代表の竹嶋信洋さんは、その狙いをこう話す。



(写真上から時計回り)「きみらぼ」の様子、きみらぼに参加した若者たちの靴（ベストサポート提供）、ベストサポートのスタッフ

困り事に気づくこともある。

はこぶねの元利用者の20代女性は、高校生の時に荒れた生活を送っていた。電車で気に入らない人を見かけたら喧嘩をふっかける。それも、フレンズと交流する中で変化が生まれた。

「私の場合は、施設で悩み事を話せる人がいなかったんです。それが、はこぶねでは何でも話せる。そんな人が施設の外にいたと思えただけで、安心できるようになりました」

休眠預金で体制を整備

社会的養護の期間が終わり、公的支援の枠組みから外れた若者は「ケアリーバー（ケアから離れた人）」と呼ばれる。そんな若者を支援するため、金融機関で10年以上取引がない「休眠預金」(22ページに解説)を活用して、支援体制を整える事業が20年度に千葉県で始まった。事業名は「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」。公益財団法人「ちばのWA地域づくり基金」が資金分配団体となり、4つの実行団体を支援した(事業概要は12、13ページ参

「社会的養護の経験者は、就職しても離職率が高い。東京都の調査では、1年以内の離職率は50・1%で、一般の高卒就職者に比べて2・5倍も高い。離職して生活に困ると、男性は犯罪組織に巻き込まれ、女性は夜の仕事をせざるをえなくなる。そうなる前に、世の中にはいろいろな会社があって、人生の物語があることを知ってもらいたかった」

事業を続ける中で手応えも感じた。就労支援プログラム「きみらぼ」では、月に1回、さまざまな企業の人たちに仕事の話をしてもらった。施設で過ごす子どもたちに、自分の将来のキャリアをイメージしてもらうためだ。講演終了後は、子どもたちは手作りの名刺を手にとって登壇者と名刺交換し、交流した。

きみらぼに協力した千葉市の児童養護施設「房総双葉学園」職員の杉下雅雄さん(9ページ記事参照)は、きみらぼの意義を、こう話す。

「施設入所者向けの就労支援は、ほかにありません。ただ、開催場所が東京で遠かったり、内容が難しすぎたりすることが多い。その点、きみらぼは施設から近いうえに、子どもたちの居場所になるこ

施設にできないことを 地域の人で支え合う

千葉モデルを
みんなでつくろう



社会福祉法人 房総双葉学園
主任指導員・職業指導員
杉下雅雄さん

子どもの虐待については、この数年で悲しい事件が相次いで報道されたことで日本全国で対策が進められています。ただ、虐待によって心の傷を抱えた子どもたちが大人になってから抱える困難については、まだ理解が進んでいないのが実情です。

私のような施設の職員は、虐待などを理由に施設に入ってきた子どもに、まずは新しい環境に慣れてもらうだけで精一杯です。18歳で退所した後も、すべての子どもと関わっていくことは難しい。

その中で、ベストサポートさんの「きみらぼ」を通じて子どもたちが社会人になった後を想定したキャリア教育を受け、そこで信頼できる大人に出会えたことは、素晴らしい経験でした。そのほかにも、社会的養護経験者が抱える困難について、積極的に理解しようとしてくれる企業の方々と出会ってネットワークを築けたことは、課題の解決に向けて今後の大きな力になるはずです。

私たちの施設は、これまでも地域に開かれた存在だったつもりでした。ただ、それは千葉市の中のある一部の地域で満足してしまっていたのかもしれませんが。休眠預金事業で生まれたこの動きを、次は千葉県全体の広がりにつなげ、社会的養護経験者が抱える困難について、もっと多くの人に認知してもらえようになりたいですね。将来的には、「千葉モデル」と呼ばれるアフターケアの体制をつくって、もっとこの問題についての理解が得られるように、みなさんと頑張っていきたいと考えています。

そこで子若では、社会的養護経験者の支援者同士の関係づくりに力点を置いている。安井さんは、こう話す。

「今のアフターケアは、支援者の経験値に頼ってしまっているのが実情です。施設によって支援内容がまったく違ってしまっている。なかには、若者の課題を支援者が抱えすぎて、苦しんでいることも

ある。そこで、勉強会などを通じて支援者同士の横のつながりを強めて情報共有できるようにして、支援者の底上げと支援の質の標準化を実現したい」

実は、冒頭で紹介した小池さんが入ったのも、相談相手だった施設の職員が、安井さんが主宰する勉強会でいっぽの会の活動を知り、小池さんに入居を進め

たことがきっかけだった。

そこは家でも会社でもない、いつでも行けて、心が落ち着く場所。小池さんは、今でも週に1回程度は若者応援ハウスに行っていて、何気ない会話をしている。

「ここは私の実家みたいなところですよ」

そう笑う小池さんは、最近できた将来の夢を、楽しそうに話してくれた。



ちば若者アフターケアコンソーシアムのメンバーたち
(ちば若者アフターケアコンソーシアム提供)

必要もある。

児童養護施設の入所者のうち約7割が虐待を受けた経験を持っている。辛い経験から他人との関係性の構築が苦手で、不安になると大人に反抗的な態度を見せることもある。物を壊す、食事をとらない、部屋を散らかしっぱなしにするなど、自暴自棄な行動をとる人もいる。住む場所がないので寮付きの会社に入ったものの、合わなくて離職する人も多い。支援者だけではなく、勤め先の企業や地域に暮らす人が、そういった特性を理解しなければケアリーバーが地域の中で安心して暮らせるようにならない。

では、具体的にどうするのか。休眠預金事業の実行団体である「ちば子ども若者アフターケアコンソーシアム(子若)」代表の安井飛鳥さんは「支援しない支援」を心がけている。子どもや若者たちと支援者が交流する「きよてん」では、小さな部屋の相談室に二人で入って子どもや若者の話を聞くのではなく、日常を大事にする。「支援する人」と「支援される人」の線引きを消して、お互いに一人の人間同士の関係になる。そんな場所が近くにあることが、社会的養護経験者の主体性

を育み、生きる力につながる。支援者にとっても支援のあり方を問い直すことになる。そんな枠組みをもっと広げたいと考えている。

だが、日本では公的な支援体制の整備は遅れていて、地域によって支援の質の差が出ているのが実情だ。



「きよてん」に集まった若者 (ちば子ども若者アフターケアコンソーシアム提供)

支援者同士のつながり

支援者、地域の人、施設の職員、企業……。社会的養護経験者が抱える課題を克服するには、幅広い分野の人が関わることが求められる。そして、一般の人にもケアリーバーの特性を理解してもらう

とも考えているので、気軽に参加できません。登壇者の話も、成功体験よりも失敗談がたくさんあって親しみやすい。プログラムに「あたたかみ」があるんです」

ちばのWAが実現したいこと

「負のサイクルから正のサイクルへ」の理論と実践

ちばのWAが本事業を通じて実現したかったのは、児童養護施設を退所した後に、若者が孤立して「負のサイクル」に陥らないようにすることでした。信頼できる大人たちがいてはじめて、地域で安心して暮らせるようになり、「正のサイクル」に入ることができます（11頁図参照）。それを実現するために、ちばのWAが考案した理論と実践方法を紹介します。



01 信頼できる大人と一緒に居場所創出とキャリア教育

国や自治体は、児童養護施設で暮らす子どもたちを支援するために、退所前の就労支援、退所後の住居支援、自立生活支援、資金の貸し付けなどを実施しています。ただ、その多くが施設を通じて受けているのが実情です。そのため、施設の方針や職員の対応によって、子どもたちが適切な支援を受けられないこともあります。

また、児童養護施設に入所している子どもたちは、親から虐待を受けた経験のある子どもも多く、そもそも

も大人との信頼関係を築くことができなことも少なくありません。このような状況を改善するには、施設退所前からのキャリア教育や周囲との関係性づくりが必要ではないかと考えました。

そこで実行団体を通じて、子どもたちが楽しく興味を持って参加できる就労支援プログラムを開発し、実施しました。

プログラムでは、子どもや若者たちが安心して過ごせる居場所をつくり、「信頼できる大人」との関係性を築くことで社会について学び、困難に直面してもいろんな人と協力し、乗り越えられるようになることを目指しました。

02 身近な場所に安心感を地域の中での自立支援

社会的養護を経験した若者が「正のサイクル」に入り、地域社会の一員として暮らしていくためには、支援者だけではなく、地域に住む人たちの理解も重要です。

支援者たちが地域のキーパーソンとなる協力者となることが地域への信頼度を高め、認知を広げていくことで子どもや若者も地域の人となりが、中長期的な関係を築いていく。そうすることで初めて、困難を抱える若者たちを社会的に包摂できるシステムが構築できると考えました。

そのために、実行団体は説明会や勉強会などを通じて、地域住民や企業に向けて社会的養護経験者が抱える課題についての理解を促進し、イベントや活動にボランティアとして参加してもらうことなどを通じて、意識や行動の変化を生み出すことを目指しました。

03 大切な支援者間の連携 事業継続のための支援

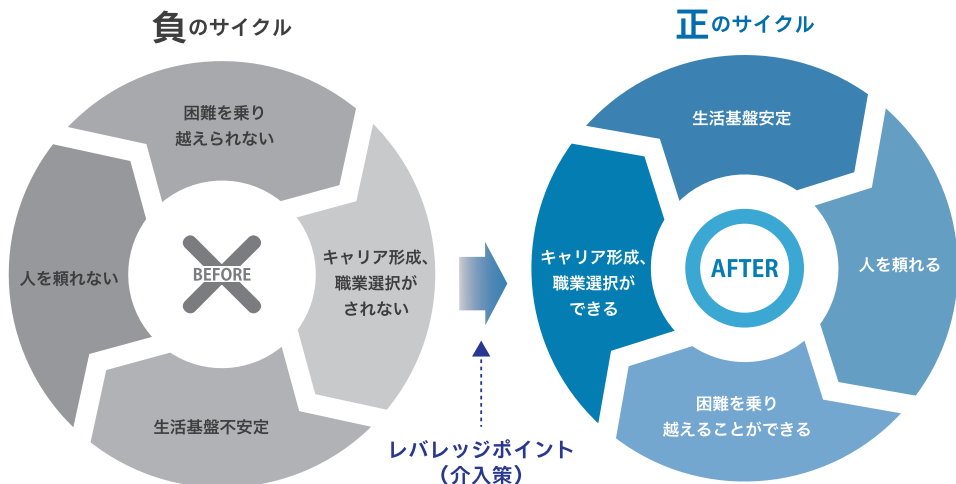
社会的養護経験者へのアフターケアは制度の拡充が図られています。が、受け皿が十分とは言えません。社会包摂システムを創出するためには支援者間が連携し、支援サービスの質と量の両面で拡充する必要がありますと考えました。

そこで、千葉県内の児童福祉施設や中核地域生活支援センターを中心に民間支援団体が研修会やイベントを開き、他の支援団体と積極的に交流して情報を共有し、困った時には支援者間で問題解決できる関係性を築くことを目指しました。

※ 困難を抱える若者たちが適切な支援を受けて立ち直ることができれば、いずれその若者は今度は困った人を支えてくれるようになるでしょう。「正のサイクル」に入ることが、社会にとって大きな利益につながるようになります。



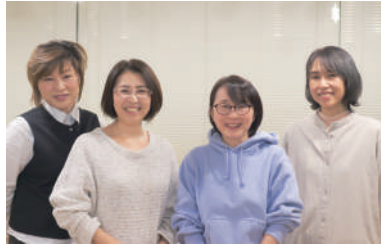
若者の孤立を防ぐシステムをつくる <セオリー・オブ・チェンジ>



(左から) ちばのWA 地域づくり基金プログラムオフィサー大村みよ子、志村はるみ

すべての若者が誰かの力になる社会へ

実行団体が振り返る事業の成果



あなたとともに(友)にいる『オトモダチ作戦』

居場所利用者数	のべ 693 人 (若者実数 25 人)
フレンズ (ボランティア) の人数	のべ 274 人 (若者実数 24 人)
児童養護施設でインケア活動	9 回
フレンズデーの実施回数	17 回
関係ができた地域の団体数	17 団体

事業費総額

17,579,493 円 (うち助成金: 16,552,335 円)

社会的養護下の若者には、いつでも相談に乗り、信頼できる大人の「オトモダチ」が必要で、生きづらさを感じている若者一人ひとりにこの「オトモダチ」ができることで、困ったときに気軽に話せるような信頼できる大人との関係を築いてもらうための活動を展開しています。

私たちはこれを「オトモダチ作戦」と名付け、まずは「フレンズ」と呼んでいるボランティア

「オトモダチ作戦」の意義を感じていただき、地域の中でも協力の輪を広げることができました。

今後も、困難を抱える若者たちが自立できるような活動を続けていきます。

八千代市

**施設入所時から支援
信頼できる大人の友達**

一般社団法人はこぶね



社会へ「いっぽ」を踏み出す基盤づくり事業

若者応援ハウスを 入居・利用した人数	9 名
若者の自立のための 振り返り面談実施回数	41 回
事業に協力した ソーシャルワーカーの人数	約 20 名
関係ができた ボランティアの人数	24 人
関係ができた地域の団体の数	9 団体

事業費総額

23,726,107 円 (うち助成金: 19,411,718 円)

若者応援ハウスは、社会的養護を経験した若者、困難や生きづらさを抱えた若者の自立へ向けた支援の拠点です。古民家を借り、おもにシェアハウス(3名人居可)の運営、相談支援、地域交流を行っています。

特に大事にしているのは「待つ支援」で、それは「まもる」でもありません。その方程式は、①若者の力を信じる↓②待つ(若者本人が動き出すのを待つ、みまも

る。安心できる環境を整える) ↓③力をあわせて一緒に乗り越える(対話や協働した食事作りなど) ↓④若者の気づき、変化、成長 ↓⑤スタッフは手を放していく ↓⑥地域の中で暮らし、自立、自律へ繋がる ——— の6段階です。

高齢者の地域包括支援センターがあるように、若者版の地域支援センター機能が求められています。今後も社会的養護のアフターケアの最終的なカタチを目指します。

柏市

**若者応援ハウスを通じ
「待つ支援」を実践**

一般社団法人いっぽの会



ちば子ども若者アフターケアネットワーク事業

連携モデルに関する 連絡会の開催数	10 回
連携モデルに関する個別の働きかけを行った機関・団体数	56 件
アフターケアに関する イベントの開催数	35 回
子ども若者との 交流企画の開催数	68 回
子ども若者と支援者が 協働して実施した会議等の数	34 件

事業費総額

26,056,984 円 (うち助成金: 20,989,100 円)

千葉県内の社会的養育経験のある若者は支援につながりにくく、特定の支援者が集中して抱え込まざるをえない状況にあります。その問題を解消するため、県内の児童福祉施設や中核地域生活支援センターを中心に、県内のアフターケア標準化のためのネットワークを構築することを目指しました。

具体的には、まずは支援者がお互いをよく知るために、①各支援者間の連絡会や勉強

会等の定期開催、②個別の支援事例を通じた連携の蓄積を事業として実施しました。

一連の取り組みを進めるにあたって、子ども・若者と支援者の両者が交流する居場所『きよてん』を開設し、イベントを定期開催しました。アフターケアネットワークづくりの働きかけと相まって、開設1年にして延べ800名以上が利用し、そこで生まれたつながりは様々な連携や取り組みにつながっています。

千葉県

**アフターケアの標準化
支援者同士のつながり**

ちば子ども若者
アフターケアコンソーシアム



大人の TERAKOYA

施設及び里親家庭への 訪問件数	60 件
きみらぼの参加者数	のべ 245 人 (実数 28 人)
出前講座を実施した企業数	83 社
イベントに参加した 地域住民と若者の人数	地域住民 112 人、 若者 24 人
就職・インターンマッチ ングの件数	就職 1 件、 インターン 2 件

事業費総額

29,116,539 円 (うち助成金: 18,207,982 円)

社会的養護下で育つ子は、いわゆる「勉強」だけではなく、暮らしに必要な知識や体験などが不十分なことも多いのが実情です。

「大人の TERAKOYA」では、①何らかの困りごとを抱えている若者に、「はたらく」知識の習得と、安心安全のための居場所を提供し、②社会的養護下の若者を支援し、社会で活躍する人材に育成し、人手不足などで困っている業界の活性化を目指します。

した。

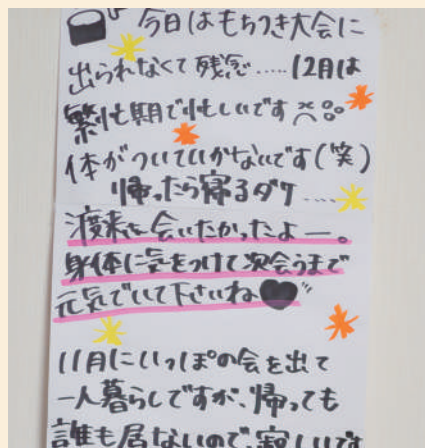
おもな取り組みとして、就業支援プログラム「きみらぼ」を毎月開催し、企業の社長や若者の交流の場を設けました。また、社会貢献活動に携わりたい企業と福祉をつなぐ役割を担う活動をしました。

3年間の活動を通じて、他の支援団体、地域、中小企業や団体とのネットワークを形成できました。今後は事業を継続していくための財源確保を目指していきます。

千葉市

**新時代の寺子屋から
知識や体験を与える**

株式会社ベストサポート



元利用者からのメッセージ（いっぽの会提供）

信頼できる人がいない

——日本では約2万3千人の子どもの親の病気や虐待、貧困などを理由に児童養護施設で暮らしています。しかし、施設を退所するのは18歳の高校卒業時が多く、その後に経済的に困窮してしまう若者もいて、社会問題になっています。

大藪 大きな課題は、退所後に就職できても、定着できない若者が多いことですね。そもそも、社会に出て働くためのエネルギーがなかったり、そのために必要な能力も18歳なのでまだ備わっていません。虐待などの過去の経験



いっぽの会
久保田尚美



はこぶね
大藪真樹



ちば子ども若者
アフターケアコンソーシアム
安井飛鳥



ベストサポート
竹嶋信洋

から大人をそもそも信用していない子もいる。困っていても言い出せない、話をしても「自分の思いを受け止めてくれない」と感じる子がたくさんいます。

久保田 気軽に話せて、頼れる大人が周囲にいないことは大きいですね。

社会的養護の経験者や生きづらさを抱えている子は、親や兄弟を頼れないことが往々にしてあります。他者との関係もうまく続かない要因にもなっています。

ただ、実際に社会に出て生活をする、親や兄弟に常にかまって生活しているわけではなく、職場や住んでいる地域が基礎になっています。その基礎となる場所で信頼できる大人と関係を築き、相談できる勇気を持つようになること。それが大切なのではないでしょうか。

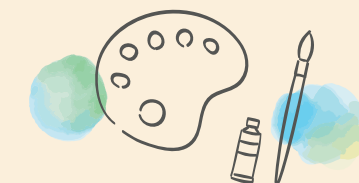
竹嶋 そうですね。信頼できる大人と関係を築くことはとても大切です。さらに言うと、就労の場面では受け入れる側、つまりは企業の側の理解も必要です。

18歳で施設を退所して就職する子どもたちは、まずは住まいの確保が重要なことで、寮付きの会社を就職先に選ぶことが多い。自分の好きなことを仕事にするのは後回し。18歳になったばかりなのに、

「休眠預金事業」やってみてどうでしたか？

輪 W A になって、語ってみよう

児童養護施設を退所した若者が抱える困難は、日本ではまだ理解が進んでいない。そのなかで、支援者たちは休眠預金事業を通じて何を実現し、どんな学びを得たのだろうか。実行団体の代表者に語ってもらった。



※実行団体の事業内容は12、13ページをご覧ください



利用者と支援者で焚き火を囲む（いっぽの会提供）

最初に直面するのは自分自身が今日を生き抜くための環境作りなんですよね。そこにエネルギーを使わざるをえません。

安井 私たちが休眠預金を通じて取り組んだのは、施設を退所した若者が、いつでもどこに行っても信頼できる大人に出会えて、標準的なアフターケアを受けられるようにすることでした。

実際に、充実したアフターケアを提供しているところもあれば、まったくでき

ていないところもあります。サービスもバラバラで、支援者から「それは自己責任だよ」と言われ、放り出されてしまった若者もいました。

あるいは、一生懸命アフターケアに取り組んでいるけど、ノウハウがなくて支援者自身がいろんなを抱えすぎてしまう。結果的に若者と一緒に苦しくなる事態も起きています。

竹嶋 福祉業界の関係者がいくら施設出身の若者を支援しても、大人の側が受け入れられるようになっていない。

それこそ大藪さんがおっしゃったように、そもそも大人を信用していないし、相談したくてもできない人がたくさんいます。会社に毎日定時に出勤することができず、突然会社を辞めてしまう。施設を退所した若者が抱える困難さについて、大人の側の理解が進んでいません。

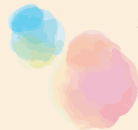
私も、福祉の世界でずっと仕事をしてきましたが、休眠預金事業で社会的養護経験者の若い人たちと接するまでは、そんな基本的なことも知りませんでした。

その意味でも、安井さんのように社会的養護経験者の支援に詳しい方と休眠預金事業を通じて知り合い、いろんな支援

をしてくれました。これは他の助成金と違うところだと思います。

安井 でも、ほかの助成金だと、使途が厳格に定められていて、特に人件費や団体の会議の開催費のような管理費には使えないものが多いんです。休眠預金は、評価を経て事業計画・資金計画の変更ができたので、私たちの事業ととても相性がよかったです。

厳しくも充実した3年



大藪 もう一回、3年間やるというのはちょっとしんどいぐらい（一同笑）。とても厳しく、でも充実した3年間でした。

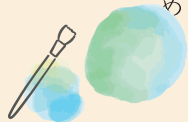
竹嶋 本当に厳しかったですね。月次の面談はいつも大変でした。

それでも、やってみてよかったです。福祉事業を展開していると、いつも感覚的なところで「良かった」と思ってしまうがちです。それではダメで、ちばのWAさんのアドバイスを受けながら利用者のアンケートを実施して、それを分析して数値化し、データに残していく。自分たちのやってきたことを記録として残せたことはとても大きいですね。

者の方と意見を交わす経験ができたことはとてもありがたかったです。

安井 いきなり一気にすべてを変えることは難しいけど、まずは支援者同士がお互いのことを知って、いろんなものを共有することがこの問題を解決するため近道なのではないでしょうか。

休眠預金事業の特徴は



——制度からもれ落ちる人の支援をしている非営利団体は、公的な補助も限られているので財政面でも苦労があるかと思えます。そのなかで、休眠預金を通じて1団体あたり上限2000万円という金額の助成を受けたことは、どんな影響がありましたか。

久保田 これまでも助成金や補助金の応募をしたことがあるのですが、ここまで事業計画をしっかりと作るのは初めての経験でした。ここまで掘り下げて、誰が見ても理解でき、納得してもらえるお金の使い方の説明を求められたことはなかったです。休眠預金という国民の資産から助成をいただく責任を感じました。

大藪 自分たちが実現したいことを、誰

大藪 記録を残せたことはとても良かったです。今までは感覚的にやってきたんだなと痛感しました。最初は成果指標を考えることが難しかったのですが、伴走支援を受けながら何度も考え直すことで、「一般の人にも理解してもらうのは、こういうことなのか」と少しずつわかってきた気がします。それも、最後の事後評価報告書を作成する中で気づいたことでした。

久保田 もともと私はアフターケアの仕事を個人でしていました。ただ、休眠預



支援者が集まったネットワーク会議（ちば子ども若者アフターケアコンソーシアム提供）

にでも理解できるように達成したい目標を立てて、それがどこまで実現できたかを測るための指標をつくる。その作業はとても難しかったです。

竹嶋 そうですね。私たちは、ちばのWAさんから「休眠というお金の性質を理解しているのか」ということをよく指摘されました。なおかつ「伴走支援」（18、19頁参照）という形でちばのWAさんが事業の進め方について細かくアドバイス

金の助成金を受けるにはチームで事業を立ち上げる必要があります、手伝ってくれる仲間を呼びかけるところからのスタートでした。でも、チームで始めたことで、私が考えていることや目標をみんなで共有できたように思います。

また、休眠預金というお金を利用させていただいている以上は、誰にも理解してもらい必要があると思います。外部の人が理解できるよう言語化して、それをまた実行に移すという作業は、とても貴重な経験でした。事業が終わった後も、もう一回同じことをやらなければと感じています。

安井 自分たちのやっていることを定期的に振り返り、客観的に分析すべきところは数値化して、多くの人に伝えることは今後、とても大切になると思います。

施設退所者のアフターケアは、生まれた環境によって困難を抱えた若者たちが、当然のものとして受けるべき権利だもつとあってほしい。その意味でも、休眠預金でできたつながりを今後もアップデートして、千葉県独自の新しい支援モデルを作っていきたいですね。



休眠預金事業の木製看板（はこぶねで撮影）

- 0年目
- 公募
 - 審査
 - 採択実行団体決定

- 1年目
- 内定実行団体説明会 4月
 - 事前評価研修
 - 事前評価実施、評価計画書作成支援 6～12月
 - キックオフ研修会 7月
 - 第2回研修会 11月
 - 中間評価研修 2月
 - 月次面談（月1回、オンラインまたは対面）
 - 会計実務サポート
 - 規程類整備支援

- 2年目
- 21年度報告書作成支援 4月
 - 情報共有会 5月
 - 会計個別指導 5～6月
 - 中間評価の実施と報告書作成支援 8～10月
 - 組織力強化ワークショップ 第1回 9月
 - // 第2回 11月
 - // 第3回 12月
 - 社会的養護学び合い 12月
 - 組織力強化ワークショップ 第4回 1月
 - // 第5回 2月
 - 月次面談（月1回、オンラインまたは対面）
 - 会計実務サポート
 - 規程類整備支援

- 3年目
- 22年度報告書作成支援 4月
 - 事後評価研修 4月
 - // 5月
 - 各実行団体の持続化・出口戦略検討 5～7月
 - チームビルディング研修 6月
 - 進捗報告書作成支援 9月
 - 事後評価学び合い 9～10月
 - 事後評価の実施と報告書作成支援 10～1月
 - 月次面談（月1回、オンラインまたは対面）
 - 会計実務サポート
 - 規程類整備支援

伴走支援の類型

- ……事業運営支援（合同研修会・勉強会・情報共有会・事例や人材の紹介等）
- ……組織基盤強化（ワークショップ・資金調達計画策定支援・実務サポート等）
- ……その他

3年間の伴走支援で学んだこと

- ▶コロナ禍により、オンラインでのコミュニケーションが多く関係づくりに時間を要した⇒何気ない会話、つぶやき拾いは大事
- ▶事業設計図（ロジックモデル）の重要性⇒しっかりつくることで、共通理解が進む
- ▶多様な場づくり、資源の活用⇒ニーズを見極めた企画とタイミングが大事
- ▶情報収集（地域の資源を知ること）と活用（組み合わせ）

2年目（2022年度）

事業が動き始めると、各実行団体の課題も顕在化します。〈中間評価〉では各実行団体の進捗状況も可視化され、計画通りに事業が進まないことに焦りを感じた実行団体もあったようです。月次面談は、実行団体からの報告・連絡だけではなく、具体的な課題や相談する場になっていきました。これは、私たちPOにとっても、伴走支援力を

3年目（2023年度）

身に付ける良い機会になりました。また、半年間の連続ワークショップの開催など、助成終了後の自走を目指す組織基盤強化もこの年から開始しました。最終年度は合同研修ではなく、各実行団体の状況にあわせて「会計・報告書作成等実務面でのサポート」「チームビルディングワークショップ」「ファンディングワークショップ」「ファン

ドレージング計画作成支援」を個別に行い、助成終了後の事業の継続性を高めることを目指しました。3年間の事業を総括する〈事後評価〉では、月次面談に加え、「事後評価学び合い」での情報共有、実行団体の拠点に向いてのいわゆる「壁打ち」、報告書作成支援などを重ね、事後評価の準備を開始した9月から1月末までの約5カ月間、実行団体を文字通り伴走支援することとなりました。

ちばのWAの伴走支援

「非資金的支援」3年間の歩み

ちばのWAは、実行団体と一緒に事業計画を何度もつくり直し、3年間の助成期間が終わったあとも事業が継続できるよう伴走支援しました。その取り組みを紹介します。

持続可能な組織づくりを目指して

休眠預金等活用制度の特徴の一つに、資金分配団体が、実行団体の運営や活動をサポートする「非資金的支援」（伴走支援）があります。ちばのWAではプログラムオフィサー（PO※）を2名配置し、実行団体の「事業運営支援」と「組織基盤強化」を実施しました。

休眠預金事業でのPOの役割は、おもに①事業設計、②審査・選考、③伴走支援、④評価の4つ。事業設計や審査・選考は資金分配団体が実施しますが、伴走支援と評価は、実行団体と一緒に決定し、目標に向けて進めます。

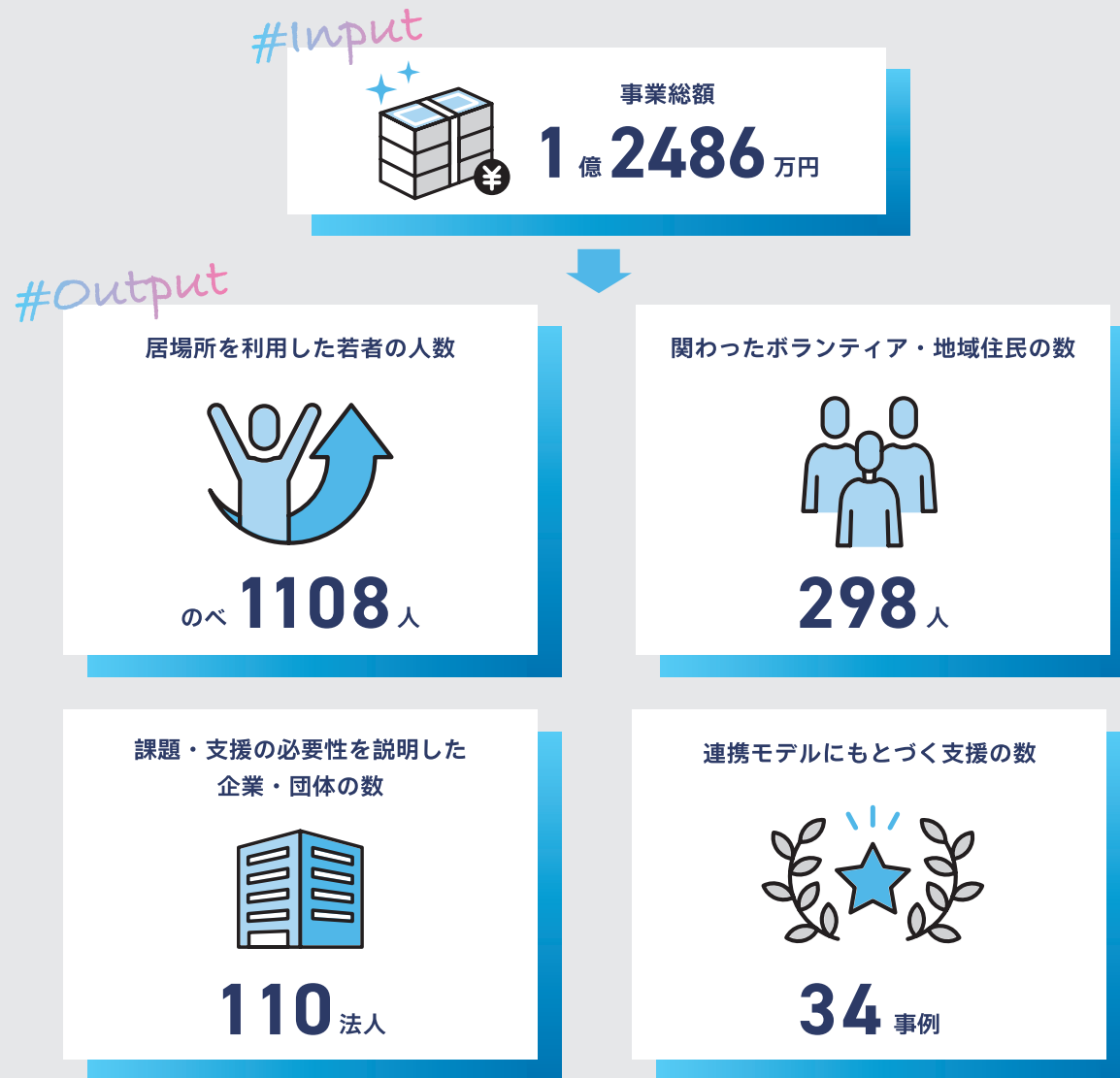
次に、伴走支援について具体的に説明していきます。ちばのWAにとっても初めての社会的インパクト評価の実施。実行団体のみならず一緒に指標やロジックモデル作りに苦勞した1年となりました。



プログラムオフィサー……研究機関やシンクタンク、財団などで、研究プロジェクトや助成事業の企画立案、運営管理などを担当する人

数字と実績で見る休眠預金事業の社会的インパクト評価

休眠預金事業では、自律的・持続的な民間公益活動の推進のため、社会的インパクト評価の実施を求めています。本事業においても、事前に社会的インパクトを測る指標を設定し、事後評価の際に振り返りました。評価結果の一部をご紹介します。



#Outcome

地域住民や事業者とつながった 4つの「地域連携モデル」ができました



社会的養護下及び経験した若者が地域で孤立せずに暮らしていくための地域連携モデルができています」と設定しました。

このアウトカムが達成できているかどうかを確認するために、「数」だけでなく、本誌で紹介したような当事者や実行団体の変化など「数では表現できない質的な変化（定性）」も抽出し、資金分配団体としての事後評価を行いました。

この過程では、「はこぶね・ベストサポート」いっぱの会において、新たに企業や地域住民が関わりながら若者に変化を生む事業が構築されたこと、「ちば子ども若者アフターケアコンソーシアムでは、支援者間の連携による支援について目標値を上回る事例ができたこと」が明らかになりました。

さらに各団体の連携事例を深掘りすると、それぞれに特色と違いがあることがわかりました。それを4つの「地域連携モデル」に分類し（20頁図参照）、このアウトカムは達成されたと判断しました。

事後評価報告書は、JANPIAの情報公開サイトからご覧いただけます。

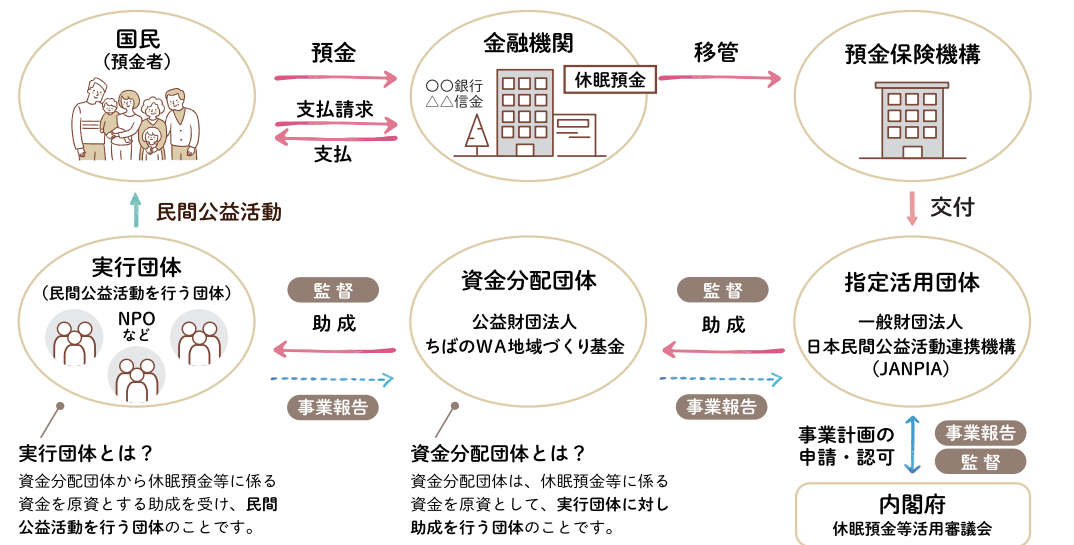
社会的インパクト評価とは、短期・長期の変化を含め、事業や活動の結果として発生した社会的・環境的な変化や便益などの「短期・中期・長期のアウトカム」を、定量的かつ定性的に把握し、事業や活動に価値判断を加えることです（JANPIA「休眠預金活用における社会的インパクト評価」より）。

具体的に理解していただくために、イラスト（21頁図参照）を作成しました。数量が示されたイラストは、本事業のインプットと、活動により生まれたアウトプットの一部です。各実行団体のアウトプットをまとめることで、本事業の全体感を「数（定量）」で客観的に捉えることができます。

これらのアウトプットから生み出された成果がアウトカムです。本事業では、事業終了時の最も重要なアウトカムを「千葉県内において、社

事業の成果を客観的に可視化

休眠預金活用の流れ



ちばのWA地域づくり基金は、設立当初から「すべての子どもが未来に夢と希望を持てる社会に——子どもの今と未来を支える基金」を設置し、子どもの貧困、虐待、孤立の実態に向き合い、解決に取り組む18の公益活動団体に助成をしてきました。その原資は332人の市民や事業者からのご寄付です。

そのなかで児童養護施設入所者、退所者等の20歳前後の若者たちの過酷すぎる実態に直面しました。保護者の適切な関与がなく、独り立ちを迫られ、不安定な生活基盤ながら頼る大人がいない。私たちはこれまで直視していなかった社会に潜む大きな課題を抱えたのでした。

2020年度休眠預金活用事業に「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」を提案し、資金分配団体として実行団体4団体とともに目指す目的にむけて進めてきました。3年間の事業は、各団体の計画達成に向けた伴走支援活動を通して、さまざまな議論を

してきました。実行団体の皆様とともに社会課題に挑む仲間として、私たちの役割を果たしてきました。

この事業で見えてきたことは、若者たちに関わる大人、地域とのつながりをつくる人の介在が重要であることです。この事業でスタートし、仕組み化したことは、若者たちと事業者をつなぐ場づくりとコーディネート、施設入所時からの地域との関係づくり、支援に関わる人・団体の情報交換・検討するネットワークづくりです。

今後もこの仕組みを継続し、さらに内容を豊かにすることで一人でも多くの若者が地域で孤立せずに地域・人と関わりをつくり、最善の利益に即した暮らしができるように願っています。

この3年間、アドバイスや助言、協力していただいた方々に、心から感謝申し上げます。実行団体の皆様には事業の成果をさらに発展させていただけると期待しております。

Message

休眠預金で地域をつくる

公益財団法人ちばのWA地域づくり基金 理事長 牧野昌子



Information 休眠預金等活用とは

休眠預金活用事業とは、休眠預金等活用法に基づき、2009年1月1日以降の取引から10年以上その後の取引のない預金等（休眠預金等）を社会課題の解決や民間公益活動の促進のために活用する制度です。

ちばのWA地域づくり基金は同事業の資金分配

団体として、社会課題の解決のために活動する団体の活動の公募審査や資金助成を行っています。また実行団体の持続可能性を高めるための組織基盤強化や環境整備などの伴走支援、事業の成果を可視化する社会的インパクト評価などにも取り組んでいます。

休眠預金交付金にかかる資金の活用により目指す姿

活用の目的

- (1) 国、地方公共団体が対応困難な社会の諸課題の解決を図る
- (2) 民間公益活動の担い手の育成と民間公益活動に係る資金調達を整備

目的達成で期待される効果

- ・社会の諸課題の解決のための自律的かつ持続的な仕組みが構築
- ・民間公益活動を行う団体の資金的自立性と事業の持続可能性を確保

財源の特性から重視すること

- ・国民、ステークホルダー（多様な関係者）への事業の透明性や説明責任
- ・事業の成果の可視化⇒社会インパクト評価の実施
- ・民間公益活動を担う組織の能力強化を目的とした伴走支援

休眠預金等活用法における優先的に解決する社会の諸課題

①子ども及び若者の支援に係る活動

- (1) 経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
- (2) 日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
- (3) 社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援

②日常生活または社会生活を営む上での困難を有する者の支援に関する活動

- (4) 働くことが困難な人への支援
- (5) 孤独・孤立や社会的差別の解消に向けた支援
- (6) 女性の経済的自立への支援

③地域社会における活力の低下その他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に関する活動

- (7) 地域の働く場づくりや地域活性化などの課題解決に向けた取組の支援
- (8) 安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援

休眠預金等活用事業 2020 年度通常枠 草の根活動支援事業 「社会的養護下にある若者に対する社会包摂システム構築事業」

事業基本情報

公募期間 1次：2021年1月15日～2月15日
2次：2021年4月1日～5月7日

助成団体数 4団体

事業期間 2020年12月～2024年3月

対象地域 千葉県内

人材 内部4名（プログラムオフィサー：専従1名、兼任2名／経理：1名）
外部2名（本事業評価アドバイザー）

Donation

家庭で暮らすことができない子ども・若者を支える 「さくら基金」への寄付を募集しています

「さくら基金」は、基金設置寄付者からのご意向により、様々な理由で家庭で暮らすことができない子ども・若者が不安を抱えることなく、社会に巣立つことができるように支援団体を実施するキャリア支援事業やアフターケア事業を支援する基金です。「桜の花が咲く季節に希望に満ちあふれた笑顔で巣立ってほしい」という寄付者の思いから「さくら基金」と名付けられました。

また、「さくら基金」では、基金の趣旨にご賛同

いただける方からの寄付も受け入れていきます。

多くの子どもたちが笑顔で社会に巣立つことができるように、みなさんのご支援で本基金を育てていただければ幸いです。

基金の詳細や寄付方法については、ちばのWAのHPをご参照ください。



発行日：2024年3月

発行：公益財団法人 ちばのWA地域づくり基金

住所：〒260-0033 千葉県千葉市中央区春日1丁目20-15 篠原ビル 301

電話：043-239-5335

休眠預金事業推進チーム

プログラムオフィサー：大村みよ子 西田すみれ 志村はるみ

事務局：元吉智子 北川高司

編集：西岡千史 稲村絵美里

デザイン：株式会社スロージャーナル

※このレポートは休眠預金を活用した事業の成果物として作成しました。



ちばのWA地域づくり基金



休眠預金活用事業